

読み物資料を用いた道徳授業の一考察

—資料「手品師」を通して—

教育実践高度化専攻
小学校教員養成特別コース

P10081H

福田 知紘

1. 研究報告書の構成

序章 研究の目的と方法

第1章 読み物資料と活用類型

第2章 道徳学習指導案「手品師」の分析

第3章 心情主義型と判断力育成型

第4章 授業実践「手品師」の分析・考察

終章 研究の成果と課題

2. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

研究の主な目的は二つある。一つは、読み物資料を用いた道徳授業について実態を明らかにし、その実効を確認することである。もう一つは、既存の道徳授業とは異なる授業を行い、その効果を検証することである。

道徳の時間において、読み物資料が使用される割合は非常に高い。しかし、指導が形式化して実効が上がっていないことや、主人公等の気持ちを問うていくスタイルばかりが行われていることが指摘されている。

これらの問題を考えていくために、本研究では従来の読み物資料を用いた道徳授業とその効果を明らかにし、またそれとは異なる授業の可能性を考察することを目的とした。

(2) 研究の方法

研究は、文献研究・学習指導案の分析・実践の三点から行った。代表的な資料を取り上げることで研究を行いやすいようにした。取り上げた資料は、「手品師」である。

資料「手品師」を常に意識しながらそれぞれの研究を進めていった。

3. 読み物資料と活用類型

(1) 読み物資料

読み物資料は、生活資料・文学資料・伝記資料・実話資料・論説資料の五つに大きく大別される。大別されたそれぞれの資料は、知見資料・葛藤資料・感動資料に分けられる。

また、資料の分類には様々な説があり、個々の資料を類型化していくことは簡単なことではない。

(2) 活用類型について

資料の活用類型には、共感的活用・範例的活用・批判的活用・感動的活用がある。

活用類型により、発問の在り方が変わってくるので、資料で何を考えさせたいのかよく考察しなければならない。

4. 道徳学習指導案「手品師」の分析

本研究における中心資料「手品師」の道徳学習指導案43編を分析することで、「手品師」の授業の傾向性を導き出した。

手品師の授業は、主に三つの発問から構成されていることが明らかになった。また「手品師」の授業では共感的活用の発問が一番多く使用されていることも明らかになった。

文学作品の代表的な資料である「手品師」の分析から明らかになったことは既存の道徳授業を考察していく上で重要な手掛かりになったと考えることができる。

5. 心情主義型と判断力育成型

(1) 心情主義型

心情主義型の授業とは、主人公の気持ちを問うていく方法の授業である。これは読み物資料を用いた道徳の授業において一番多く行われている授業であり、「手品師」の授業でも一般的であることが調査から明らかになった。

主人公の気持ちを問うことで、多様な考え・感じ方を引き出すことができる心情主義の授業は広く一般的に行われているのである。

(2) 判断力育成型

資料「手品師」の授業スタイルには、心情主義型のものの他に判断力育成型のスタイルがある。道徳性を構成する諸要素には、道徳的心情・道徳的判断力・道徳的实践意欲と態度があるが、判断力育成型の授業では、道徳的判断力に焦点を当てている。判断力育成型の授業では、様々な行動の可能性を考える過程を通して道徳的判断力を養っていくことを目的とする。

6. 授業実践「手品師」の分析・考察

(1) 実践について

文献研究・学習指導案の分析を踏まえた上で「手品師」の授業実践を行った。

実践では、中心発問に批判的活用の発問を取り入れた。中心発問は、「どうして大劇場に行かずに男の子の方に行きましたか」である。この中心発問を行うことで、手品師の中にある誠実な心に迫っていくというねらいを達成できると考えたのである。また、批判的活用の発問は「手品師」の授業ではほとんど使用されない発問である。

批判的活用の発問を中心発問に使用することで、従来の授業とは異なる反応が得られるのではないかと考え、実践で検証を行った。

中心発問に批判的活用の発問を取り入れたが、基本発問に共感的活用の発問も取り入れた。そうすることで共感的活用の気持ちを問う発問の効果を確認できると考えたのである。

(2) 実践の成果

実践は、中心発問を批判的活用の発問で行い、共感的活用の発問も取り入れた。

共感的活用の発問は、その効果が疑問視されているが実践を通して十分効果的な発問であると感じた。

批判的活用の発問により、児童はより深く思考することができたのではないかと考察する。それは、児童の発言から明らかになったことである。手品師における「誠実」という価値を考えていく上で一般的な型の発問と異なる発問を使用して実践を行ったがその効果はあったと考察する。

(3) 実践の課題

実践の課題は、主に二つある。一つは、価値が「誠実」ではなく「思いやり」に傾いてしまったことである。もう一つは、資料における価値をどう扱うのかということである。

資料「手品師」における価値の内容項目は「誠実・明朗」である。それは、自分自身に関することである。手品師の中にある誠実な心に迫っていくように発問を考えたが、結果を見ると児童の思考は親切・思いやりに傾いてしまった。

資料「手品師」の価値は「誠実」である。そのため、「誠実」という価値に向かって授業が組み立てられることになる。そうすることは道徳の授業において本当によいことなのだろうかと実践を通して感じたことである。

7. 研究の成果と課題

本研究の目的は、読み物資料を用いた既存の道徳授業を明らかにし、その実効を確認することと、それとは異なる授業を行い、効果を検証することであった。

それぞれの目的を達成するために文献研究・学習指導案の分析・実践を行った。その過程で得られたことは大きな成果である。

しかし、目的を達成するための検証は不十分だと感じている。今後、実践を重ねていき、読み物資料を用いた道徳授業についてより深く考察していく必要がある。